

令和4年度  
自然体験活動等長期研修

# 研修報告書

## 研究課題

— 一歩踏み出す勇気と共同体感覚を育む体験活動に関する研究  
— AFPYの手法を活用した事前・事後学習を含む宿泊学習を通して—

周南市立菊川小学校

教諭 清水 香代子

(令和4年度自然体験活動等長期研修教員)

## 目 次

### 1 研究の意図

- (1) 研究の背景
- (2) 研究テーマ設定の理由
- (3) 研究の仮説

### 2 研究の内容

#### (1) 研究の方法

- ア AFPY とは
- イ 本研究における一歩踏み出す勇気と共同体感覚とは
- ウ 研究の構想
- エ 研究の進め方
  - (ア) 調査のねらい
  - (イ) 調査内容・方法
  - (ウ) 調査時期
  - (エ) 調査対象

#### (2) 研究の実際

- ア 事前授業の概要
- イ 宿泊学習の概要
- ウ 事後授業の概要

#### (3) 調査結果と考察

- ア 共同体感覚尺度の調査結果
- イ 一歩踏み出す勇気の日常生活への適用と勇気づけの手立て
- ウ 事前学習と事後学習の有効性
- エ ビーイングの有効性と日常生活における活用
  - (ア) 有効性
  - (イ) 活用法

### 3 研究のまとめと今後の課題

- (1) 研究のまとめ
- (2) 今後の課題

# 一歩踏み出す勇気と共同体感覚を育む体験活動に関する研究 —AFPY の手法を活用した事前・事後学習を含む宿泊学習を通して—

周南市立菊川小学校 教諭 清水 香代子

## 1 研究の意図

### (1) 研究の背景

近年、学校不適応に関する問題を抱える子どもたちは、毎年増加傾向にある。文部科学省の問題行動・不登校調査（令和4年10月）では、令和3年度に年間30日以上欠席した不登校の児童生徒数が24万4940人であり、前年度と比べて24.9%（4万8814人）増加し、過去最高だったことが分かった。文部科学省は、不登校に関して、新型コロナウイルス感染症の影響により、学校行事や部活動、日常の授業におけるグループ活動など様々な活動が制限され、登校意欲が下がったことや、休校による生活リズムの乱れが戻らないことが原因ではないかと分析している。

現在のコロナ禍においては、登校の制限は徐々になくなりつつあるものの、物理的にも精神的にも人とのつながりは希薄になり、周りの人と協力したり困難に進んで挑戦したりする機会や意欲は減少している。そのような背景が、子どもの心に大きな影響を与えていると考える。

### (2) 研究テーマ設定の理由

集団宿泊活動の効果について、国立青少年教育振興機構による「小学校の集団宿泊活動に関する全国的な調査（令和元年3月）」によると、多くの学校が集団宿泊活動の教育効果を認識している。調査項目の中でも、「共通の目標に向かって協力するようになり仲間意識が向上した」、「自分に自信をもつことや自分が学級に役立っていると思うなど自己を肯定的にとらえるようになった」、「自ら考え行動するようになった」、「今まで交友関係がなかった児童同士に新しい交友関係が芽生えるなどよりよい人間関係が育まれた」の各項目は、「とても思う」と「少し思う」を合わせて90%を超えている。ここから、集団宿泊活動が、児童生徒の良好なコミュニケーションを構築し、主体性や自己肯定感、自己有用感を育てるといった教育的な効果を生み出していると考えられる。

本研究では、集団宿泊活動に AFPY の手法を取り入れることで、その効果をより一層高めることができると考え、その仕組み方を試行することにした。各学校で行われている宿泊学習に、AFPY の手法を生かした事前学習及び事後学習を合わせて実施することで、よりよい人間関係を築く上で大切な一歩踏み出す勇気や共同体感覚を育むことができ、宿泊学習の教育効果を高めることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

### (3) 研究の仮説

以上のことから、研究の仮説を「AFPY の手法を用いて、勇気づけやコミュニケーションの手立てを工夫した体験活動を取り入れた事前学習、宿泊学習、事後学習を行うことで、一歩踏み出す勇気と共同体感覚をもつ子どもを育てることができるのではないかとし、実践を通して検証することとした。



二つ目は、「体験→振り返り→概念化・一般化→適用」という体験学習サイクルを意識し、そのサイクルを回すための手法として「ビーイング」(図2)を事前学習、宿泊学習、事後学習において一本の軸として活用した点である(図3)。ビーイングとは、AFPYにおける目標設定や振り返りの活動の一つであり、目標達成のために大切だと気付いたことや学びを模造紙等には書き、自分たちの力で自分たちの行動規範をつくりあげていくものである。ビーイングは、学びや気づきを視覚的に共有することができ、また、それらをいつでも再確認できるので、体験学習サイクルを回す上でとても有効な手法である。



図2 ビーイング

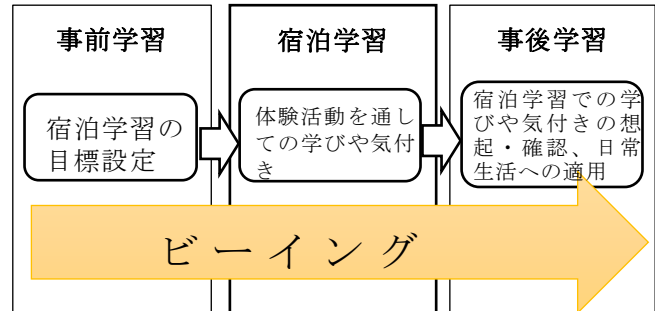


図3 ビーイングを軸とした体験活動のイメージ

このように、ビーイングを一步踏み出す勇気と共同体感覚を育む手立てとして、事前学習から宿泊学習、事後学習の全ての体験活動を通して活用することで、宿泊学習の教育効果を高めることができるのではないかと考え、研究の構想を図4のとおりとした。

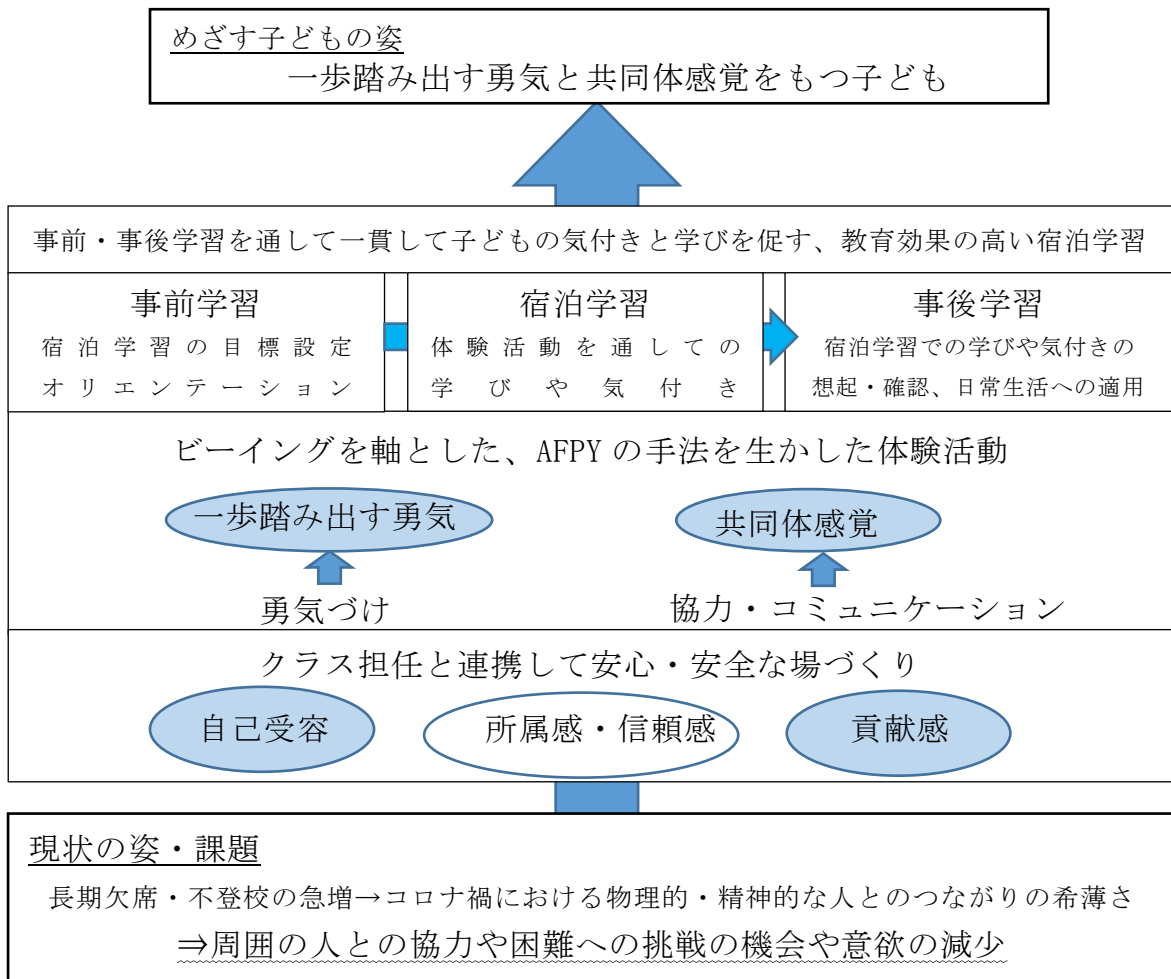


図4 研究構想図

## エ 研究の進め方

### (7) 調査のねらい

児童の一步踏み出す勇気や共同体感覚の変容について調査する。

### (4) 調査内容・方法

本研究では、12校の小学校（協力校）を対象に、宿泊学習だけでなく、事前学習、事後学習にも関わった。なお、事前学習と事後学習とは、協力校で行った宿泊学習前後の授業だけでなく、担任が児童に対して行う指導や授業、ビーイング等を活用した教育活動を含む、宿泊学習に関わる学習全般を指すもので、筆者が行った事前学習での授業は事前授業、事後学習での授業は事後授業とする。

本研究での調査は、事前授業、宿泊学習、事後授業の前後に行った合計6回のアンケート（「小学生版共同体感覚尺度」と自由記述）と先生方へのアンケートの分析、体験活動をする児童の行動観察から、一步踏み出す勇気と共同体感覚を育むことができたかを検証することにした。

アンケートは、和光大学現代人間学部心理教育学科教授 高坂康雅氏が作成した、「小学生版共同体感覚尺度」を参考にした。本尺度は、第1因子「自己受容」、第2因子「所属感・信頼感」、第3因子「貢献感」の3つの因子からなる。本研究では、「友達とのつながりアンケート」（参考資料1参照）という題名を付け、それぞれの因子項目を小学生に理解できる表現に修正し、各因子を4項目ずつに統一した（表1）。

また、「あなたの気持ちに最も近いものを○で囲んでください」という教示のもと、「そう思う」を4点、「少しそう思う」を3点、「あまりそう思わない」を2点、「全くそう思わない」を1点とする4件法で回答を求め、集計した。なお、6回のアンケートは、児童の集中を保つために、毎回各項目の順を入れ替えたものを使用し、6回分の平均値と各因子の平均値の推移を求めた。自由記述式欄には、体験活動の中において、一步踏み出す勇気が生まれた場面と友達とのつながりや協力を感じられた場面についてその理由を書かせた。

表1 小学生版共同体感覚尺度3つの因子別質問項目

第1因子「自己受容」	第2因子「所属感・信頼感」	第3因子「貢献感」
・今の自分を大切にしている。	・クラスの中で困った時に助けてくれる友達がいる。	・友達のためになることを進んですることができる。
・自分のいいところを知っている。	・自分はクラスの中で安心して生活できている。	・どの友達に対しても、思いやりをもって接することができる。
・今の自分に満足している。	・自分はこのクラスの友達を信じていることができる。	・自分から進んで、クラスみんなと協力しようとしている。
・いいところも悪いところも含めて、自分のことが好きと言え。	・自分はクラスの仲間の一員だと感じている。	・困っている友達に、進んで手助けをすることができる。

### (7) 調査時期

令和4年5月から10月にかけて、調査を実施した。

### (I) 調査対象

山口県十種ヶ峰青少年自然の家を宿泊学習で利用する、県内12の小学校第4～第5学年14学級239名を対象に調査研究を行った（表2）。





とも相手のために言ってみよう」と心から思える心理的安全性が大事である。また、共同体感覚をもつためには、一人のチャレンジをみんなのチャレンジにすること、つまり「自分は終わったから関係ない」ではなく、その場にいる全員の心が最後まで集中してみんなと共にここにあることが大事である。そこで、「あ：安心・安全」「こ：ここにいる」を特に強調して説明した。

二つ目は、「Cゾーンチェック」である（図6）。これは、同じ状況であっても、人によって安心や不安など感じ方はみな違うということを互いの立ち位置で視覚化する活動である。自分にとって何の困り感もなく余裕でこなせるという「安心ゾーン」にいる限り、人は行動を起こす必要性を感じないため成長しにくい。逆に、自分にとって絶対無理だ、できるわけがないと思い込んでいる

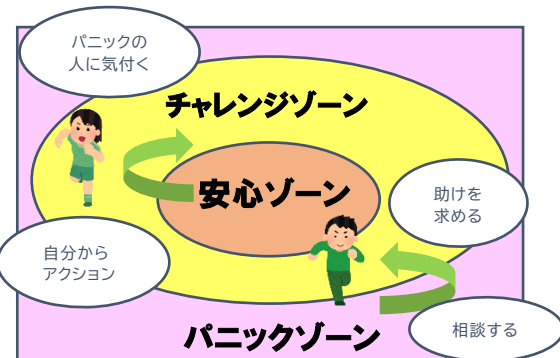


図6 Cゾーンチェックのイメージ

る「パニックゾーン」にいる時も、恐怖心のために行動に移せないため成長は難しい。人が一番成長できるのは、「ドキドキして不安もあるけれども、一歩踏み出してやってみようかな」と思える「チャレンジゾーン」にいる時であるという話をした。みんながこの「チャレンジゾーン」にいる仲間であるためにはどうしたらいいのか、例えば「安心ゾーン」にいる人は、「同じ状況下でもパニックになっている人がいることに気付くこと」「その人に何ができるか自分からアクションを起こすこと」がチャレンジゾーンに一歩踏み出すことかもしれない、「パニックゾーン」にいる人は、『助けて』『困ってるんだ』『教えて』とヘルプサインを出すこと」がチャレンジになるかもしれないという話をした。全員がチャレンジゾーンにいるために、自分に何ができるかを考えることが大事であると伝えた。

宿泊学習中は、主に「とくさがみね森のチャレンジコース」<sup>注1</sup>（以下、森チャレ）を担当し、活動ごとに振り返りをした（図7）。「チャレンジが成功したのは（もしくは、うまくいかなかったのは）、なんでだと思う？」「勇気を出して思い切ってチャレンジする人がたくさんいたね。誰がどんな勇気を出したか気付いた人はいる？」などと問いかけ、気付きをその場で「手のひらビーイング」の手のひらの外側にメモさせた。

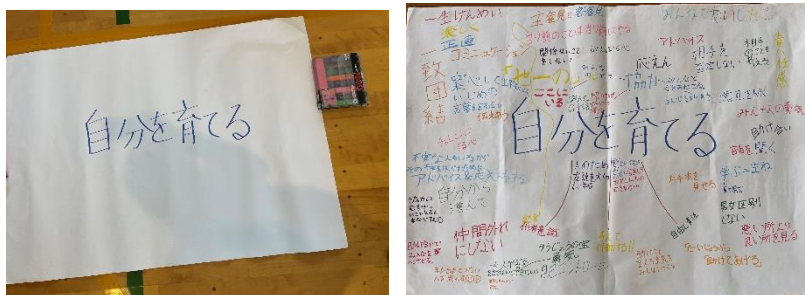
宿泊学習の最後の振り返りでは、様々な気付きの中から、「明日からの日常生活で生かしたいと思える、持ち帰りたい大事な宝物は何？」と問い、指に5つの気付きを選んで書かせた。その際、児童の気付きに対し、必ず勇気づけとなる言葉を返すようにした。「まずやってみるという言葉が宝物として心に残ったんだね。あなたならこれからの生活の中できっとできるよ」「あの時の〇〇さんの勇気に気付いた、あなたのその視点がすてきだね。きっとこれからも友達によさに気付ける人になれるよ」など、宿泊学習を終えて家庭や学校に戻ってからの日常生活につながるようなフィードバックを返すようにした。



図7 森のチャレンジコースと振り返りの様子



また、手のひらビーイングを基に、模造紙などの大きなビーイングにも目標に向かうために大事だと思う学びや気づきを書きこみ、学級全員で共有した（図8）。今後も、宿泊学習で学んだことを自分たちでつくった自分たちの規範として活用するために、事あるごとに振り返りに使ったり、書き加えたりしてほしいと伝えた。なお、手のひらビーイングは、キャリアパスポートや教室掲示などに活用していただきたいと担任の先生に提案した。



## ウ 事後授業の概要

図8 宿泊学習前(左)と事後授業後(右)のビーイング

事後授業では、ビーイングを見ながら宿泊学習での学びや気づきを想起し、それを日常生活で生かすことをねらいとした AFPY の課題解決型の活動と振り返りを行った（参考資料4参照）。事後授業は、宿泊学習の1週間後から7週間後頃に行った。

導入では、体験活動の写真をスライドで見たり、「あ・い・し・た・こ」や「Cゾーンチェック」の話をしたりすることで、宿泊学習の雰囲気や出来事を具体的に想起できるようにした。展開では、協力して課題を解決する活動を行った。終末では、ビーイングを活用し、新たな学びや気づきを書き足すようにした。ビーイングに書かれたことは、宿泊学習や活動の中でしかできないことではなく、日常生活の中において活用できる再現可能な行動指針であることを押さえた。例えば、算数の問題が分からなくて困っている子や悪口を言われて悲しい思いをしている子に気付いた時、「私は安心ゾーンにいるけれど、あの子はパニックゾーンにいる」と考え、「ヒントを出してもいい?」「一緒に考えてみようか」「一緒に先生に相談しに行ってみる?」と気遣いや手助けの言葉をかけることができる。また、授業中に誰も発言せず静まっている状況や先生が不在の自習中に騒がしい状況の時に「私には関係ない」と思うのではなく、勇気を出して挙手したり、「静かにしようよ」と全体に呼び掛けたりすることもできる。今まで見て見ぬふりをしてきたことや分かっているけれどできなかったことに対し、一歩踏み出して自分にできることはないか、クラス全体のつながりを大切にするために何ができるのかを考え行動することは、自分の生活の中でできるチャレンジであると伝えた。今後も、宿泊学習や事前授業と事後授業での学びを本当の自分の宝にするためにビーイングを活用して、目標に向かうクラスやなりたい自分をめざしてほしいと伝えた。

## (3) 調査結果と考察

### ア 共同体感覚尺度の調査結果

共同体感覚尺度の平均点の推移（図9）を見ると、事前授業前後の①から②は0.04ポイント、宿泊学習前後の③から④は0.11ポイント、事後授業前後の⑤から⑥は0.02ポイントと、それぞれ上昇した。①から⑥にかけても、全体的な向上が見られ、中でも、宿泊学習前後の③から④にかけては0.11ポイントと最も上昇した。これは、目標達成に向けて問題解決をする中で仲間との信頼関係やコミュニケーション能力を育むという宿泊学習の教育効果の高さを示していると考えられる。また、共同体感覚尺度の3因子の推移（図10）も、共同体感覚尺度の平均点の推移と同様の増加傾向が見られる。

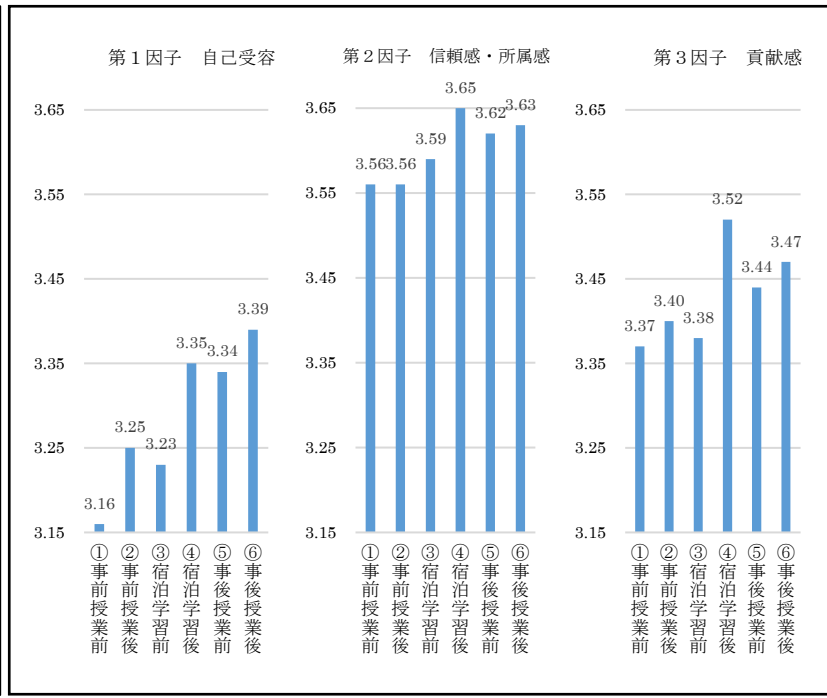
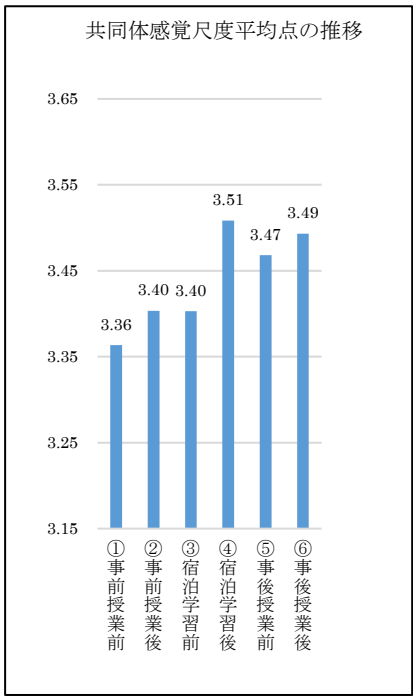


図9 共同体感覚尺度平均点の推移

図10 第1因子自己受容、第2因子信頼感・所属感、第3因子貢献感の推移

3つの因子を比較すると、第1因子の自己受容の平均点が、第2因子の信頼感・所属感と第3因子の貢献感と比べ、全6回のアンケートを通じて全体的に低いことが分かる。「いいところも悪いところも含めて、自分のことが好きだと言える」「今の自分を大切にしている」「自分のいいところを知っている」「今の自分に満足している」の4つの質問に対し、事前授業前の数値が低いことから、ありのままの自分を受け入れることに抵抗がある児童が多いと推察される。こうした自己受容感が、①から⑥にかけて0.23ポイント上昇した。これは、他の2つの因子の上昇率（第2因子は+0.07ポイント、第3因子は+0.10ポイント）よりも大きい。本研究において、第1因子の自己受容は、今回の取組で最も伸びた因子といえる。

自己受容感が向上した例として、ある協力校では次のような集団の変容があった。事前授業で行った「カテゴリー」という活動で、「朝ごはんを食べるならパン？ご飯？」「山と海、夏休みにいきたいのはどっち？」という質問に対し、ある女子が動いた方にほとんどの女子が移動するという現象が見られた。そこから、人と外れた言動をして目立つことを恐れ、自分の意志ではなく、リーダー格の児童に同調して動く児童が多いように見受けられた。事前授業の時、担任からは、集中して話を聞くことが難しい児童が多く、女子は友達間でのトラブルも多発していると聞いていた。しかし、宿泊学習での様々な活動を通し、互いの思いを出し合うことで目標達成に近づいたり、全体への貢献につながったりする体験をした。宿泊学習の最後の活動で、「犬派？ネコ派？」と再び「カテゴリー」を行ってみたが、事前授業の時とは違い、自分の選択で動いた児童が増えた。

また、同校児童の感想を見ると、「宿泊学習に行く前のぼくは、自分をチャレンジしない子と感じていたけど、Jタワーでさらに上の柱に行くことを決意した時が成長を感じた」、「今まではくやしいと感じた時に声を出せなかったけど、Jタワーを登って、まだ行けたと思った時に『くやしい！』と声を出せた」といった姿からも、自己受容感が育まれた個人の変容が伺える。

これらの事例から、AFPYの手法を用いた体験活動を通して、どんな自分でも受け入れて

もらえるというクラスへの安心感や信頼感が高まり、ありのままの自分でいいのだという自己受容感が向上したと考えられる。事後授業の時、その担任から「宿泊学習後に水泳大会があったのだが、こちらが『応援しようや』など言わなくても非常に応援が盛り上がり、すばらしかった」と聞いた。個々の自己受容感の高まりに伴い、クラス全体の共同体感覚が高まったと考えられる。

一方で、共同体感覚尺度の平均点と3つの因子の平均点はそれぞれ、②から③にかけて、④から⑤にかけて若干の減少が見られた。ここから、高まった共同体感覚が、次事を行うまでの期間に薄れてしまったと推察される。そこから、児童の自己受容感を高める手立ては日常的に必要なということが分かる。つまり、宿泊学習に行き終わり、活動を1～2回行えばよいということではなく、生活や体験活動全般において、活動の振り返りを行い、学びや気づきを児童の言葉で概念化・一般化し、それを適用してさらに新しい体験にチャレンジする、といった一連の体験学習サイクルを回し続けていくことこそが大切であるといえる。

以上のことから、AFPYの手法を用いた体験活動や体験学習サイクルが、共同体感覚全体の向上につながったと考察する。

## イ 一歩踏み出す勇気の日常生活への適用と勇気づけの手立て

アドラー心理学における勇気の重要な要素について、岩井（2014）の「リスクを引き受ける力」「困難を克服する努力」「協力できる能力」という捉え方を参考にした。

児童と先生方へのアンケートの自由記述欄から、宿泊学習での学びや気づきによって、日常生活でも、「A:リスクを引き受ける力＝失敗を恐れず思い切って挑戦する力」、「B:困難を克服する努力＝自分の欠点や弱さを認め、困難は克服できるものだとし立ち向かう力」、「C:協力できる能力＝他者貢献や当事者意識、合意形成、関わりの広がり」といった点で、勇気を出して一歩踏み出す児童の姿が見られた（表3）。

表3 アンケート調査の自由記述欄から抜粋した児童と先生方の感想

勇気の要素	児童の感想	勇気づけとなった手立て
A: リスクを引き受ける能力 → 失敗を恐れず思い切って挑戦する力	・ 体育委員会で発表するときに、6年生はもう発表したから、5年生の誰かが発表しないといけないと思って、森チャレの時のように <b>ぼくがチャレンジして手を挙げて発表してみた。</b> ・ 今まではクラスの中で、発表する人としらない人がいたけど、宿泊学習での <b>チャレンジゾーン</b> に踏み出す勇気を生かして、発表する人が増えたと思った。	→ 宿泊学習中の「できた!」という体験 → Cゾーンチェック
B: 困難や苦手を克服する努力 → 自分の欠点や弱さを認める力 → 困難に立ち向かう姿勢	・ 行く前は自分を「どうせ運動ができないから無理無理」と思っていたけど、 <b>みんなに応援されて、目標が達成できたときに自分の心が成長したと感じた。</b> ・ プールでくらげうきができなかったけど、 <b>宿泊学習の森チャレでのキャットウォークを思い出して、勇気が出てできた。</b> ・ 困ったときや助けてほしい時に自分から声をかけるように頑張っている。あまり親しくない人にも勇気を出して声をかけるようにしている。	→ 友達からの声かけ・関わり → 宿泊学習中の「できた!」という体験 → Cゾーンチェック
C: 協力できる力 → 他者貢献 → 当事者意識 → 合意形成 → 関わりの広がり	・ 宿泊学習で自分で言わないと相手に伝わらないということを学んだから、仲が良かった友達ともっと仲がよくなったし、話したことがあまりない人ともしゃべることができた。 ・ 宿泊学習に行く前、私は心は違うことを考えることがあったけど、今は前以上に <b>ここにいる?</b> と自分に呼び掛けて、行動するようになった。	→ 宿泊学習中の「できた!」という体験 → フルバリューコントロール

勇気の要素	先生方の感想	勇気づけとなった手立て
A: リスクを引き受ける能力 →自分を信じて思い切って挑戦する力	・今までは全体に声をかけることが少なかった子が、宿泊での声かけやグループでの活動を通して <u>自信をつけ</u> 、学級全体の様子を見て声をかけることが増えた。 ・「安心」「挑戦」の <u>つながり</u> に気付き、意識して行動したいと考える子どもがいた。 ・課題に対して <u>自分事として考える</u> ことができるようになった。だれに対しても、物おじせず声をかけ続ける子どもも増えた。	→友達からの声かけ・関わり →Cゾーンチェック →フルバリューコントラクト
B: 困難や苦手を克服する努力 →自分の欠点や弱さを認める力 →困難に立ち向かう姿勢	・事前研修の段階では、抽象的だった子どもたちの思いが、宿泊学習・事後指導を通して、「 <u>〇〇さんの～の声かけがあったから勇気を出すことができた</u> 」などと振り返っていた。 ・事前授業前と事後授業後と比べて、一人一人の意識は確実に課題と向き合うようになった。今までは他人事だったことも <u>自分の意思</u> をその課題に向け、行動できるようになった。	→友達からの声かけ・関わり →フルバリューコントラクト
C: 協力できる力 →他者貢献 →当事者意識 →合意形成 →関わりの広がり	・〇〇さんは、以前はわがままを言ったり、騒いでいる児童と一緒に遊んだりという姿が多かったが、森チャレでリーダーとしての <u>役割を全うした</u> ことでみんなをまとめることができるようになった。 ・今までは全体に声をかけることが少なかった子が、宿泊での声かけやグループでの活動を通して <u>自信をつけ</u> 、学級全体の様子を見て声をかけることが増えた。 ・〇〇さんは、進んでみんなのために動こうという姿勢はあまり見られなかったが、事後授業では、進んでカードを集め、ひもを回収し、 <u>みんなのために自分ができることを探す姿勢</u> が見られた。	→宿泊学習中の「できた!」という体験 →宿泊学習中の「できた!」という体験 →Cゾーンチェック

これらの一歩踏み出す勇気を分析すると、主に次の四つの手立てが勇気づけとなったのではないかと考えられる。

一つ目は、「今までの自分だったら無理と思っていたことも、友達が応援してくれたからできた」といった、友達からの声かけ・関わりである。また、友達の勇気ある一歩を見て自分もやってみようと思えたという感想もあり、友達からの励ましやアドバイスだけでなく、友達のよさから学び合える関係性も勇気づけとなり、一歩踏み出す勇気につながったと推察される。

二つ目は、相互尊重の約束「フルバリューコントラクト」である。『心はここにある?』という言葉を出して、みんなで話し合おうと声をかけることができた」という感想から分かるように、「あ・い・し・た・こ」という合言葉は認識しやすく、「失敗しても大丈夫」という安心安全な場をつくり、一人のチャレンジをみんなのチャレンジにするために有効な勇気づけであったと推察される。

三つ目は、「Cゾーンチェック」の活動である。「チャレンジゾーンに一歩踏み出すために勇気を出して発表してみた」という感想にあるように、一つの目標に向かう集団になるために今の自分にできることは何かを常に意識する上で、児童にとって分かりやすい活動であった。

四つ目は、宿泊学習中の「できた!」という成功体験である。事後授業の後に、ある担任が、「複式学級なので、大人数の学校の友達の輪の中に入ることに不安があった〇〇くんが、泳ぐのが苦手だったが練習をがんばり、水泳大会で100m泳ぎ切った。『何でがんばれたの?』と聞くと、『森チャレで涙が出るくらい怖い思いをした。あれだけがんばれたんだからと思ったら勇気が出た』と言っていた」と話してくれた。その児童の事後授業後のアンケートには、「ぼくはあきらめやすかったけど、宿泊学習をして何事もあきらめずにチャレンジすることができるようになった。水泳を200m泳ぐ目標を立てたのでその目標に向かってがんばっている。されていやなことは『やめて』と言えるようになった」とあった。宿泊学習での成功体験が自分自身への勇気づけとなり、日常生活の中でもしっかりと息づいていることが分かった。

以上のような、友達からの声かけ・関わりや、相互尊重の約束「フルバリューコントラク

ト)、「Cゾーンチェック」の活動、「できた！」という成功体験を増やすことなど、児童の一步踏み出す勇気を育む手立ては、教育活動全般で講じることが重要であると考える。

## ウ 事前学習と事後学習の有効性

先生方に行ったアンケートの「事前・事後授業は、貴校の宿泊学習のねらいを達成するために有効であったと思いますか」という問いに対し、全員から有効であったと回答があった。「どういった点でそう思われましたか」という欄には、体験学習サイクルに関わる感想が最も多かった(表4)。体験活動での学びを日常生活に適用できる学びにつなげることを一貫して意識した事前・事後学習が、体験学習サイクルを回す上で有効であったと考える。

表4 アンケート調査の自由記述欄から抜粋した先生方の感想

	先生方の感想
体験学習サイクルを回す	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前授業は、子どもたちが<u>見通しをもって</u>取り組むことができるように、事後授業は、宿泊学習のねらいを<u>想起</u>するために有効だった。</li> <li>・事前授業から事後授業を通して、進んで行動、チャレンジ、アイデアといった<u>大切なこと</u>に目を向けることができた。</li> <li>・ねらいとする「良好な人間関係の構築」「積極性」に焦点化し、常に意識して宿泊学習に取り組むことができた。<u>生活の中に生かす</u>という視点で何度も振り返りを行うことができた。</li> <li>・今回初めて事後指導もセットで宿泊学習を行ったが、授業の最後に振り返りを行うことで学びが深まるように、<u>宿泊学習で学んだことを確かなものにする</u>上で有効であると感じた。</li> <li>・仲間とのつながりや個人の挑戦について体験を通して<u>繰り返し考える</u>ことができた。</li> </ul>

また、宿泊学習の前後に事前・事後学習を行ったことで、豊かな人間関係が築けたという感想も多くいただいた(表5)。

表5 アンケート調査の自由記述欄から抜粋した先生方の感想

	先生方の感想
人間関係づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・AFPY やビーイングを取り入れて、授業を進められており、その中で、子どもたちは、<u>仲間意識を高めたり、自分自身を振り返ったり</u>することができた。</li> <li>・<u>友達から仲間へと関係性が変わった</u>と感じた。</li> <li>・周りの友達に目を向けたり、苦手なことがある友達にも声を掛けたりと、自分のことだけでなく周りの人のことも思いやることのできる場面が増えた。また、宿泊学習でグループに声を掛けていた子どもが学級集団に戻っても全体に声を掛けられるようになってきた。</li> </ul>

ただし、それは筆者が行った事前・事後授業だけが要因ではない。協力校の先生方が、日々の学校生活の中でビーイングを活用したり、学級通信に事前・事後授業の様子を載せたりと、事前・事後授業を含めた宿泊学習での学びを児童の学校生活に適用させることを意識して指導をされた影響が大きいと推察される。

以上のことから、一貫したねらいをもった事前・事後学習は、宿泊学習と日常生活をつなぎ、よりよい人間関係を築くことに有効であったと考える。体験活動をその場だけのものとしてせず、体験学習サイクルを回すことが、宿泊学習の教育効果を高めるのに効果的であった。日常生活とのつながりを意識した体験活動を意図的に仕組むことは、宿泊学習に限らず、教育活動全般において重要であると考えられる。

## エ ビーイングの有効性と日常生活における活用

### (7) 有効性

先生方へビーイングの有効性を質問したところ、全員から「共有化」「意識化」「想起・振り返り」の手立てとして有効だったとの回答があった。児童のアンケートの記述欄から

も、ビーイングに書いた言葉が心の支えや指針になった姿がうかがえる（表6）。

表6 アンケート調査の自由記述欄から抜粋した担任の先生方と児童の感想

	先生方の感想
共有化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねらい達成のために児童が感じたことを共有化、意識化するための方法として有効だった。</li> <li>・自分だけでなく、友達の思いを知ることができると感じた。</li> <li>・子どもたちが活動中にビーイングに書かれていた言葉を何度も口にしていた。</li> </ul>
意識化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「書く」という活動に自分の決断が求められる。他者の考えから考えを広げられた。</li> <li>・ビーイングによって、自分を見つめ、大切なことに気付くことができた。</li> <li>・自分の思いを文字で表したり、友達の思いを知ったりすることによって、意識していなかった自分のがんばりや思いに気付くことができた。宿泊学習前、子どもたちは「自分のすてきなところ」を見つけることができなかったが、宿泊学習後は「すてきな自分」に気付くことができるようになった。</li> </ul>
想起・振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大判用紙に書いたことで可視化され、授業後も継続して活用できるから。</li> <li>・困ったときや悩んだときは、ビーイングを見て振り返ることで、具体的な支え方や励まし合う姿勢を思い返すことができていた。</li> <li>・手元に残り、何度も確認できるものがあることで、折に触れて振り返りができた。</li> </ul>

	児童の感想
共有化 意識化 想起・振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宿泊学習前は「みんなで」よりは「一部の人で」が多かったけど、宿泊学習が終わって「みんなで」というキーワードにみんなが気を付けているから、みんなで話し合いができていると感じている。</li> <li>・ビーイングに書いた「自信をもつ」を思い出して、自信をもってチャレンジができた。</li> <li>・体育のハードルの時、「小さなことでも協力する」ことを思い出して、役に立てなくても小さなことでも協力した。スイミングの時に「ペアをつくって泳いで」と言われて一人女子が余ったけど「一人をつくらない」ということを思い出して3人で泳いだ。</li> </ul>

前述のアとイに示したように、本研究で一步踏み出す勇気と共同体感覚の向上が認められたが、その最も大きな手立てとなったのがビーイングの活動であると考えられる。ビーイングによって、事前授業では、宿泊学習で何をめざすのかという大前提を共通認識でき、同じ方向に向かう集団になった。宿泊学習では、手のひらビーイングという携行できるスタイルにしたことで、活動を通して生まれた新鮮な発見をその子なりの言葉で、その場で書き留めるという即時性が有効であった。全体の振り返りにおいても、手のひらビーイングが手元にあることで、感想を伝え合う時に想起しやすく、意見交流に役立った。その伝え合いを基に、大きなビーイングに、めざす目標につながる様々な学びや気づきを書き、視覚化することができた。また、日常生活でも、学びを適用できた。

以上のことから、事前学習、宿泊学習、事後学習と全ての活動を通して、一本の軸として活用したビーイングが、活動から得られた学びの概念化・一般化に有効に働き、児童の一步踏み出す勇気や共同体感覚の育成に効果的であったといえる。

#### (イ) 活用法

先生方にビーイングの活用法について聞いたところ、表7のように、宿泊学習での学びを一過性のものにせず、「学習のまとめ」「学級目標やめあての作成」「問題解決」「次学年への期待を高める」「節目での振り返りややる気の想起」「新たな気づきや学びの蓄積」の手立てに活用されていることが分かった。また、「あ・い・し・た・こ」や「安心ゾーン・チャレンジゾーン・パニックゾーン」を教室掲示に使いたいという先生も複数おられ、AFPYの理念が学校現場の中で児童の成長に効果的だという認識が広まった。



表7 アンケート調査の自由記述欄から抜粋した担任の先生方の感想

活用法	先生方の感想
学習のまとめ	・宿泊学習後に2つの「ビーイング」を教室に掲示し、子どもたちの目に入るようにした。学習のまとめとして、新聞づくりをする際に、掲示してある「ビーイング」を見ながら、 <u>当時の活動を思い出しまとめることができるようにした。</u>
学級目標やめあての作成	・本学級では、宿泊学習後にビーイングを生かして「学級目標」を立てた。宿泊学習で学んだことをクラスに生かそうとする意識が高まったと感じる。また、手のひらビーイングも掲示し、自分ががんばりたいことという個人の目標を立てることもできた。朝の会で学級目標を音読する際にも見て意識させるようにしている。 ・2学期のめあてを立てる時に、宿泊学習での <u>具体的な学びを想起させ、思いを共有した。</u>
問題解決	・週明けや何か生徒指導上の問題が起きた時など、 <u>ビーイングをみんなで確認する</u> ようにしている。「そんなことがあったね」「今週はここを頑張ろう」など、話しながら活動を行っている。
期待を高める	・廊下に掲示しているため、4年生が見て、 <u>来年度への期待をもっているようだ。</u>
節目での振り返りややる気の想起	・1学期の最後の学級活動で、学級の成長を、子どもたちの具体的な姿で実感させるために使った。また、これは予定だが、夏休み明けの最初の朝の会で、ビーイングの用紙を提示することで、1学期の成長を2学期につなげたいと考えている。 ・水泳記録会や遠泳大会前などに、 <u>やる気を促すために活用した。</u> ・一人ひとりの挑戦と集団の成長を話し合う時に、 <u>今回の共通体験について思い出せるよう、ビーイングや写真を掲示しておく。</u>
新たな気付きや学びの蓄積	・代表委員会での <u>話し合いで決まったことを書き加えたり、6年生も加わって、自分たちのクラスの学級目標を達成するために頑張るとよいことや気を付けることを書き加えたりした。</u>

### 3 研究のまとめと今後の課題

#### (1) 研究のまとめ

本研究において、「AFPY の手法を用いて、勇気づけやコミュニケーションの手立てを工夫した体験活動を取り入れた事前学習、宿泊学習、事後学習を行うことで、一步踏み出す勇気と共同体感覚をもつ子どもを育てることができるのではないか」という仮説を立て、検証した。その結果、子どもの一步踏み出す勇気と共同体感覚の向上が見られた。子どもの一步踏み出す勇気と共同体感覚の向上には、AFPY の手法を用いた様々な体験活動を通して、指導者や仲間からの勇気づけやコミュニケーションの手立てが有効であったと考える。特に、事前・事後授業という日常生活とのつながりを意図した活動と、全ての活動を通して行ったビーイングが有機的に機能したことによる成果が大きいと考える。ビーイングによって、全ての体験活動がつながり、一步踏み出す勇気や共同体感覚につながる学びや気付きを日常生活で活かすことができ、宿泊学習の教育効果を高めたといえる。中でも、共同体感覚の自己受容感の向上には、顕著な高まりが見られた。同時に、共同体感覚向上を図るためには、生活全般を通じ、計画的・継続的に AFPY の手法を活用した体験活動を仕組み、体験学習サイクルを回し続けていくことが重要であることが分かった。

以上のことから、本研究は、「AFPY の手法を用いて、勇気づけやコミュニケーションの手立てを工夫した体験活動を取り入れた事前学習、宿泊学習、事後学習を行うことで、一步踏み出す勇気と共同体感覚をもつ子どもを育てることができるのではないか」という仮説を支持するものであったといえる。

#### (2) 今後の課題

本研究から、AFPY の手法を取り入れた体験活動や、体験学習サイクルが一步踏み出す勇気

や共同体感覚をもつ子どもを育むことに有効だと分かった。一方で、以下の二つの課題が挙げられる。

一つ目は、一步踏み出す勇気や共同体感覚をもつ子どもを育む手立ては日常的に必要なということである。そこで、今回の研究の特徴の一つでもある、事前・事後学習という行事と日常生活をつなげる学びを仕掛け、年間を通して AFPY の手法や体験学習サイクル、及びビーイングを計画的・継続的に仕組んでいきたい。

二つ目は、宿泊学習以外の他の学習活動や学級経営において本研究をどう生かすか、さらにビーイングや AFPY の手法について、他の先生方にも使っていただけるようにするにはどうしたらいいか、ということである。そのためにまずは、私自身がさらに AFPY の活用の研究を深め、宿泊学習だけでなく、あらゆる教育活動において、本研究で学んだ勇気づけやコミュニケーションの手立てを工夫した体験活動を取り入れたい。その上で、所属校において、現在のカリキュラムにビーイングや AFPY の手法が無理なく取り入れられるような提案をし、学校全体で取り組めるよう推進していきたい。

今年度、このような貴重な研修の機会を与えていただいた山口県教育委員会、本研究に際してご協力いただいた各学校、山口県十種ヶ峰青少年自然の家の職員の皆様をはじめ、ご指導いただいた全ての方々に心より感謝いたします。ありがとうございました。

#### 【引用文献】

\*1 岸見一郎、「アドラー心理学入門」、1999

#### 【注】

注1 山口県十種ヶ峰青少年自然の家のアドベンチャープログラム施設「とくさがみね森のチャレンジコース（森チャレ）」

#### 【参考文献】

- ・山口県教育委員会、山口県教育推進の手引き、2020
- ・プロジェクトアドベンチャージャパン、「クラスのちからを生かす」、2013
- ・プロジェクトアドベンチャージャパン、「グループのちからを生かす」、2016
- ・ウィリアム・J・クレイドラー他、「対立がちからに」、2014
- ・岩井俊憲、「人生が大きく変わるアドラー心理学入門」、2014

#### 【参考ホームページ】

- ・文部科学省、「令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」、2022
- ・国立青少年教育振興機構、「小学校の集団宿泊活動に関する全国的な調査」、2019

## 友達とのつながりアンケート①

月 日

( ) 小学校 ( ) 年 ( ) 組 ( ) 番 ( 男 ・ 女 )

名前 ( )

\* 次の1～12までの質問に対して、あなたの気持ちに最も近いものを○で囲んでください。

1	今の自分を大切にしている。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
2	クラスの中でこまった時に助けてくれる友達がいる。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
3	友達のためになることを進んですることができている。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
4	自分のいいところを知っている。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
5	自分はクラスの中で安心して生活できている。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
6	どの友達に対しても、思いやりをもってせつすることができ ている。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
7	今の自分に満足している。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
8	自分はこのクラスの友達を信じている。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
9	自分から進んで、クラスのみならず協力しようとしている。	まったくそ う思わな い	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
10	いいところもわるいところもふくめて、自分のことが好きと 言える。	まったくそ う思わな い	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
11	自分はクラスの仲間の一員だと感じている。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う
12	こまっている友達に、進んで手助けをすることができている。	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	少しそう 思う	そう思う

宿泊学習事前授業指導案(45分Ver.)

山口県十種ヶ峰青少年自然の家  
長期研修教員 清水 香代子

<指導目標>

安心安全な場をつくり、ビーイングを軸とした体験活動を通して、宿泊学習の目標を考える中で、一歩踏み出す勇気と共同体感覚を育てる基盤づくりをする。

<指導の手立て>

- ①心と体をほぐし、エラーを楽しむ体験活動を取り入れ、安心安全な場をつくり、勇気を出せる基盤づくりをする。
- ②協力して課題を解決する体験活動を取り入れ、共同体感覚を育む基盤づくりをする。
- ③体験活動を通しての学びや気づきを振り返る時間を十分に取、宿泊学習への意欲を育てる。

<準備物>

十種ヶ峰青少年自然の家等紹介写真、ロープ、模造紙、カラーペン、ストップウォッチ、A4用紙(児童数分)、模造紙(児童に探検ボードと鉛筆をもたせておいてもらう)

<指導計画>

	活動内容 ○活動名	働きかけ ★留意点
緊張をほぐす (10分)	1 十種ヶ峰青少年自然の家の紹介(施設や職員、森チャレ等の写真) 2 心と体をほぐす活動 ○後出しじゃんけん ○石・はさみ・紙じゃんけん	・宿泊学習で訪れる施設について事前に知ること、安心感をもたせる。 ・負けても笑顔で楽しむ大切さを伝え、児童の緊張を和らげる。 ★エラーを楽しむことで、失敗してもいいことや失敗したときの周りのフォローについて考えさせる。
協力して課題を解決する (20分)	3 振り返り活動の見直し ○ビーイング 4 協力して課題を解決する活動 ○カルガモ母さん(手指消毒) ○クロック or 手たたきインパルス	・担任の先生に学級目標、もしくは宿泊学習を通して目指したいクラスの姿について聞き、中央に書いていただく。 ・それに向かうクラスになるために大切なことを模造紙に書き込む振り返り活動を行うことを知らせる。 ・一人では解決できないけれど仲間がいたらできる体験を通して、集団が一体となる感覚を味わえるようにする。
振り返りと目標設定 (15分)	5 振り返りの活動 ○ビーイング ○手のひらビーイング 6 友達とのつながりアンケート記入	・目標に向かうクラスになるために自分に何ができるか、友達にどうしてほしいか、ビーイングに気づきを書き込ませる。 ・A4用紙に各自、手指の形をなぞり、手のひらの中央に学級目標、もしくは宿泊学習を通して目指したいクラスの姿を書かせ、手のひらビーイングを作成する。 ★ビーイングは、今回限りではなく、宿泊学習や今後の学校生活での気づきを付け加えたり、振り返ったりするために使うものだと説明し、このクラスみんなでつくっていく規範(具体的な行動目標)であることを伝える。

宿泊学習指導案(森チャレVer.)

山口県十種ヶ峰青少年自然の家  
長期研修教員 清水 香代子

<指導目標>

ビーイングを活用して宿泊学習中の学びや気づきを振り返り、日常生活に活かせるように概念化を図ることで、一歩踏み出す勇気と共同体感覚を育む。

<指導の手立て>

- ①「あ・い・し・た・こ」と「Cゾーンチェック」の共通理解により、一歩踏み出してみようと思える、つながりの感じられる安心安全な場をつくる。
- ②森チャレ等の活動を通して、周囲の勇気づけやつながりを感じる体験から、一歩踏み出す勇気や共同体感覚を育む。
- ③ビーイングによる振り返りを通して、体験からの学びや気づきを日常生活でも生かそうとする意欲を育てる。

<準備物>

「あ・い・し・た・こ」カード、「Cゾーンチェック」カード、ガムテープ、手のひらビーイング、大きいビーイング、カラーペン、アンケート(児童数分) (児童に探検ボードと鉛筆をもたせておいてもらう)

<指導計画>

一日目	活動内容 ○活動名	働きかけ ★留意点
(約1時間) 全体AFDY	1 友だちとのつながりアンケート記入 2 心と体をほぐす活動 ○セブンイレブンじゃんけん ○お金じゃんけん ○ガムネーム 3 宿泊学習の目標と約束の共通理解 ○あ・い・し・た・こ ○Cゾーンチェック	・大きいビーイングを見ながら、目標を確認する。 ・勇気と仲間とのつながりを感じるために必要な「安心・安全」「ここにいる」を特に強調して押さえ、「チャレンジゾーン」が一番成長できることを確認する。 ・森チャレの活動で学んだことを各自で手のひらビーイングに書きこみ、その中から日常生活に持ち帰りたい5つの宝物を最後の振り返りの時に選ぶことを伝える。
森のチャレンジ (約3時間)	1 森チャレの活動 ○ローエレメント ・ジャイアントシーソー ・ニトロクロッシング ・TP シャッフル 等 2 振り返り ○手のひらビーイング	・活動ごとに、その場で手のひらビーイングに学びや気づきを書かせる。 ★「成功したのは(もしくはうまくいかなかったのは)なぜか」「協力と感じたのは誰のどんな姿か、どんな言葉か」「勇気を出して一歩踏み出した瞬間はいつだったか」「誰のどんなチャレンジが心に残っているか」など、具体的な児童の姿を引き出す問いかけをする。
二日目	活動内容 ○活動名	働きかけ ★留意点
(約3時間) 森のチャレンジ	1 森チャレの活動 ○ハイエレメント ・Jタワー ・キャットウォーク 等 2 振り返り ○手のひらビーイング	★森チャレの活動が、チャレンジャーだけでなく、全員のチャレンジとなるよう、「あ・い・し・た・こ」と「Cゾーンチェック」を適宜想起する。 ・体験から得られた発見を概念化するために、活動ごとにその場で手のひらビーイングに学びや気づきを書かせる。
(約1時間) 振り返り	1 気づきの交流と5つの宝の選択 2 大きいビーイングの記入 3 友だちとのつながりアンケート記入	・手のひらビーイングに書きこんだことを小グループで意見交流させ、日常生活に持ち帰りたいことを各自で5つの宝物として選ばせる。 ・最も大切だと思う宝物を発表させ、大きいビーイングに書き込み、クラス全体で共有する。 ★ビーイングは、今後の日常生活でも使える行動指針であることを押さえる。

## 宿泊学習事後授業指導案(45分Ver.)

山口県十種ヶ峰青少年自然の家  
長期研修教員 清水 香代子

### <指導目標>

ビーイングを軸とした体験活動を通して、宿泊学習で学んだ一歩踏み出す勇気と共同体感覚などを想起し、体験からの学びを日常生活の中で生かせるようにする。

### <指導の手立て>

- ①心と体をほぐし、安心安全な場をつくり、一歩踏み出す勇気を出す意欲を育てる。
- ②協力して課題を解決する体験活動を取り入れ、共同体感覚を育む。
- ③体験活動を通しての気づきや学びを振り返る時間を十分に取し、学びのサイクルを生かそうとする意欲を育てる。

### <準備物>

短ロープ(児童数分)、「あいしたこ」カード、「Cゾーンチェック」カード、ストップウォッチ、カラーペン、アンケート(児童数分)、大きいビーイング(児童に探検ボードと鉛筆をもたせておいてもらう)

### <指導計画>

	活動内容 ○活動名	働きかけ ★留意点
緊張をほぐす (10分)	1 心と体をほぐす活動 ○キャッチ ○前後左右  2 宿泊学習の学びの想起 ○あ・い・し・た・こ ○Cゾーンチェック	★エラーを楽しむことで、失敗してもいいことや失敗したときの周りのフォローの大切さを確認する。  ・ビーイングを見ながら、宿泊学習でのチャレンジする勇気や協力する姿を具体的に思い出し、体験からの学びを生活に生かしていくことが今日のゴールであると投げかける。 ・勇気とつながりを感じるために必要な「安心・安全」「ここにいる」を特に強調して押さえ、「チャレンジゾーン」が一番成長できることを再確認する。
課題を協力して解決する (20分)	3 協力して課題を解決する活動 ○フラフープリレー	・アイデアを出し合ったり、全体を考えて動いたりする大切さを感じる活動を通して、宿泊学習で書いたビーイングの中にある言葉が日常生活でも活かせることを確認する。
振り返り目標設定 (15分)	4 振り返りの活動 ○ビーイング  5 友達とのつながりアンケート記入	・宿泊学習での学びと今日の体験を通して、これから一年かけて目標に向かうクラスになるために大切だと思ったことを出し合う。自分に何ができるか、友達にどうしてほしいかを具体的に考え、ビーイングに書き込ませる。 ★学びを生活の中で生かすために、具体的な事例(勉強で分からないことがあるとき、友達に悪口を言われたとき、など)を挙げ、その時みんなにできることは何か考えさせる。